

【追悼】（『統計学』第88号 2005年3月）

浦田直美先生を偲ぶ

吉田 忠*

2005年1月5日、本学会会員、立命館大学名誉教授の浦田直美先生が逝去された。享年79歳であった。縁あって長くご交誼をいただいた一人として、まことに残念でたまらない。まだまだお元気でいていただきたかった。先生にはし残されたお仕事がたくさんあっただろうにと思うと、なおさら残念である。編集部から紙数をいただいたのを機に、統計学及び本学会とのご関係を中心に在りし日の先生を偲んでみたい。

先生は、1925年3月4日、当時日本の植民地だった台湾の基隆市でお生まれになり、旧制台北高等学校理科1類を卒業された。台湾総督府立の台北高校は七年制で尋常科は台湾きっての名門、私の母校の台北市立建成小学校から二、三年に一人その尋常科に入ると、校長が朝礼でその子を紹介するほどであった。

台北高校を終えた先生は三泊四日の船旅で「内地」に向かい、大阪帝国大学理学部物理学科に入学された。1947年9月に大学を卒業されるとすぐに大阪府立産業医学研究所に研究員として入られた。この研究所は、その後機構改革で府立労働科学研究所、府立公衆衛生研究所と変わるが、そこで先生は、職業病の代表とも言える「けい肺」の発生に関する統計的研究を続けられる。そして1959年には、「『けい肺』の発生状態に関する統計的研究」で大阪大学から旧制の医学博士を授与された。なお、故丸山博先生が厚生省から大阪大学医学部教授（衛生学講座）に赴任されたのは1958年4月である。浦田先生は、丸山先生が大阪労働基準局労働衛生課長を勤めておられた

1947年ごろからのお知り合いであったが、この論文執筆の頃から丸山先生のグループに本格的に参加されたものと思われる。

私が初めて浦田先生にお会いしたのは1966年である。『統計学』の「本会記事」を見ると、この年の5月28日、大阪大学医学部中之島図書館で関西支部例会が開かれているが、そこで当時京大医学部の奈倉道隆さんの報告「社会医学における統計調査」に続いて、浦田先生が「Vital Statisticsの周辺」という報告をされた。私が今でも覚えているのは、半対数グラフ上のV字型年齢別死亡率を示して「これこそ『死神の秩序』である」と言われたこと、そして10代後半から20代にかけて死亡率が高くなる「こぶ」は、戦前は肺結核、戦後は交通事故と自殺によると指摘されたことである。今は広く知られているこの事実も当時の私にはとても新鮮で、人間における自然現象と社会的事実との関係をいろいろ考えさせられたのであった。

浦田先生の年譜を拝見すると、「1965年4月、経済統計研究会会員」とあるから、この御報告が最初の関西支部例会報告であったと思われる。しかし、丸山グループにおける浦田先生のお仕事の中で最も重要なものは、森永ヒ素ミルク中毒事件における「14年目の訪問」であろう。

今から50年前の1955年、岡山県、徳島県を中心に乳児の「奇病」が大量に発生した。翌56年の調査では、その患者は12千人を超え死者は130人に達したという。やがてこれは、森永乳業(株)徳島工場でのドライミルク製造に際し誤って混入されたヒ素による中毒事件であることが判明した。これに対し、森永によ

* 京都橘女子大学文化政策学部

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

る被害者への補償と国・自治体等による後遺症の検診・治療が一応行われ、被害者父母の憤懣・不安を残しながら、後遺症はなく問題は解決したとされたのである。刑事裁判でも、森永乳業は一審で無罪となった。

1968年秋、ある養護学校教諭からその後遺症と思われる重大な障害（脳性マヒ）を持つ児童が居ることを知らされた丸山先生は、「他にも居るであろう」と、各地の保健婦を中心に医学生まで動員した組織的な訪問聞き取り調査を始められたのである。1969年になってからであったが、これが「14年目の訪問」であり、その成果として当初の130人をはるかに超える死者と多数の重度障害児童の存在が確認された。この事実は、同年10月に岡山市で開かれた第27回日本公衆衛生学会での共同報告「14年前の森永 MF ミルク中毒患者はその後どうなっているか」を機に、大きな社会的反響を巻き起こした。そしてそれまで「森永ミルク中毒の子供を守る会」を始め被害者家族への対応を避けてきた森永も交渉の椅子につかざるをえなくなった。その後経過はあったが1973年になり、個々の因果関係を問わず森永ヒ素ミルクを飲んだ被害者総てを救済するための組織として、森永の拠出金を基にした財団法人ひかり協会の設立が、国、「守る会」、森永の三者の間で合意されたのである。

浦田先生は、この「14年目の訪問」の企画と実施に中心人物の一人として加わり、積極的に活躍された。そして、1969年の日本公衆衛生学会でも一緒に学会報告をなされたのである。先生は、丸山先生の追悼文集『無告の民と歩む』で書いておられる。丸山先生との40年余りのご交誼は、ただ丸山先生から多様な問題を提起されるばかりだったが、「一つだけ『一個の存在』になり得たのは、『14年目の訪問』でした。」と…。

先生は1974年からは(財)ひかり協会京都府地域救済対策委員長を務められ、自ら被害者救済に挺身されたが、その御努力を晩年まで

続けられた。また、『森永ヒ素ミルク中毒事件—京都からの報告—』（1973、ミネルヴァ書房）、『14年目の訪問 [復刻版]』（1988、せせらぎ出版）等にも寄稿しておられる。まこと、浦田先生の御生涯の後半は森永ヒ素ミルク中毒事件被害者の救済と共にあった、と言えるであろう。

このようなご活躍の中、1970年には立命館大学に招聘されて経営学部助教授に就任された(翌年、教授に昇任)。先生が招かれたのは学園紛争の最中であったが、そのお人柄や社会経験を武器に学園紛争収拾にも大きく貢献された。そして1979年からは選ばれて経営学部長を務められた。学部長の他にも、立命館大学生協理事長、立命館大学計算機センター所長等の要職を務められた後、1990年3月、立命館大学を定年退職された。その退職後はもっぱら(財)ひかり協会のお仕事に従事されたのである。

先生のお人柄は、そのとつとつとした、あるいはシミジミとした語り口からも窺えるように、誠実さの一言に尽きる。正確には、洒脱さを兼ねそなえた誠実さとでも言うべきであろうか。二、三度ご一緒した木屋町のバーでは、意外にも越路吹雪のシャンソンを口ずさまれることがあった。どうして越路吹雪なのか、その辺のことをもう少し聞いておくべきだったと悔やまれる。

また先生は在職中から、ゆくゆくはインドの統計学者マハラノビスの研究をまとめたいと語っておられた。事実、定年退職後も立命館の図書館に通われて、インドの統計学専門誌 *Sankhya* などを読んでおられたようである。マハラノビスをまとめる時間を浦田先生から奪ってしまった天を怨みたい。そして在りし日の浦田先生の面影を偲びつつ、先生のご冥福を心からお祈りしたい。

(追記) 故丸山博先生のグループの「14年目の訪問」については、本文中に示した文献の

他, 丸山博著作集3『食生活の基本を問う』
(1990, 農山漁村文化協会), 丸山博『保健婦

とともに—21世紀の保健婦を考える—』
(2000, せせらぎ出版)等を参照されたい。